

# 協励アカデミー 令和3年度 第1回漢方・皮膚セミナー レポート

開催日 2021年(令和3年)6月6日(日)  
開催方法 Zoomでのオンライン開催

## ●漢方

指導講演

長野・(有)タカハシ薬局

高橋 敏先生

「処方決定のコツ①芒硝・大黄」

## ●皮膚

指導講演

宮城・あい薬局

鈴木 康弘先生

「楽しいHIFUBYO

～間違えやすい皮膚病・見分け方  
と対処法～」

2021年(令和3年)6月6日(日)、  
協励アカデミー令和3年度第1回漢  
方・皮膚セミナーがZoomを利用し  
たオンラインで開催されました。

漢方・皮膚セミナーは協励会の  
基本である「皮・美・漢」のうち、皮  
膚病と漢方薬について講師の先生  
が基礎から分かりやすく解説する  
セミナーです。昨年は残念ながら  
コロナ禍で中止されましたが、今  
年はZoomのウェビナーを利用し  
て開催されました。

最初の指導講演は長野・(有)タ  
カハシ薬局の高橋敏先生による  
「処方決定のコツ①芒硝・大黄」で

す。高橋先生は協励2世で、生家  
は代々生薬・漢方を扱われていた  
そうです。1978年(昭和53年)  
に長野支部の漢方講座で藤本肇  
先生と出会って師事されました。  
『KYOREI』に2015年(平成27年)  
より「漢方処方の解説」を連載さ  
れています。

初めに五行色体表、五行配当表  
などの漢方を考えるための基本を  
説明していただきました。次に、  
高橋先生が以前書かれた「『婦女  
子と小児は治し難し』を考える」  
(『KYOREI』2015年(平成27年)4  
月号)をもとに、問診のコツを教え  
ていただきました。

コツの一つ目は患者さんの言う  
ことをそのままメモすることで  
す。具体的には、「肩こりがひど  
い」と言ったら問  
診する側は、「肩  
こりがひどいん  
ですね」と繰り返  
し返します。次に  
「だるい、疲れが  
たまる」と言っ  
たら、「だるくて、  
疲れがたまるんで

すね」と言うように、患者さんの訴  
えの語尾に「～ですね」と付け加  
えて答えるだけで、アドバイスな  
どをしないようにし、まず訴えを  
しっかりと聞き取るそうです。協  
励用語のオウム返しをしっかりと  
実践することが大切であると、改  
めて学びました。

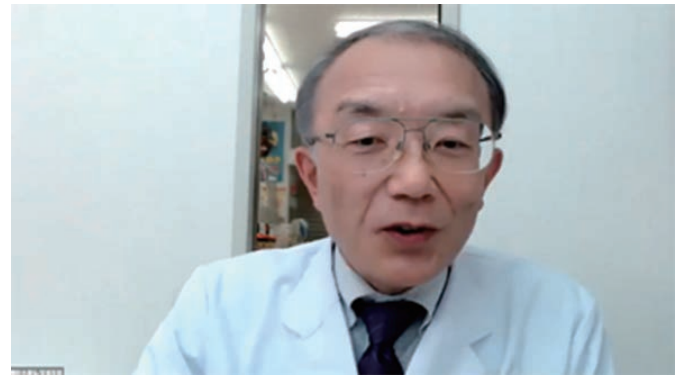
コツの二つ目は、患者さんの訴  
えが複数の場合は、「具合の悪い点  
で、一番困ったことから順番にお  
話しいただけますか」とお願いす  
ることだそうです。例えば先ほど  
の患者さんは、「肩こりがひどい、  
だるい、疲れがたまる」に続いて  
「仕事が多忙になると食欲がなく  
なる、疲れると下痢になる、手足の  
冷え、結婚8年目で不妊」と、大き  
く分けて六つの悩みを先生に打ち



小田美良会長



長野・高橋敏先生



宮城・鈴木康弘先生

明けたそうですが、困ったものから順番にお話しいただくことでどのような処方をするか考えることができるそうです。

コツの三つ目は、生薬ごとの薬味薬能から処方内容を決定することです。先ほどの症例では、肩こりから葛根が考えられ、手足の冷えから気血の巡りが悪いのか、裏寒があるのかを判断し、当帰が妥当か検討します。このときはトイレの回数が少ないということから茯苓を思い浮かべ、悪夢が多い、口渇から石膏も検討されたそうですが、このときは内熱がなかったため、「渇く」ではなく「乾く」だと考えられ、括楼根の処方だと判断されて、柴胡桂枝乾姜湯を出されたそうです。

続いて方剤決定のコツをもとに、芒硝の入った処方についてお話しいただきました。まず、調胃承気湯の条文について『傷寒論』『金匱要略』を使い解説いただきました(太陽病上編と中編、40条、67条、陽明病30条、70条、71条)。その後、大黄についてお話しいただきました。高橋先生がお住まいに

なる長野県は信州大黄の産地ですが、いまはかなり数が減っているとも紹介されました。大黄という一般的な便秘に用いるイメージが強いと思いますが、熱性の下痢に対しても使用することがあるそうです。大黄は目が赤く、小便の色が濃いなど、内熱があることを使用目標にすればよいそうです。その後、大黄の入った処方である大承気湯について説明いただきました。

漢方講演のなかで岐阜・(株)伊藤薬局の伊藤祥央先生に条文の載っているテキストのページをご紹介いただきました。

続いて皮膚病講演では宮城・あい薬局の鈴木康弘先生に「楽しいHIFUBYO～間違えやすい皮膚病・見分け方と対処法～」というタイトルでお話しいただきました。鈴木先生の趣味は昆虫採集であり、スライドのスタートはトンボとチョウの写真でした。トンボはオニヤンマ、チョウはアゲハチョウだったのですが、なぜそれを選んだのかという問いかけから皮膚病も同様に鑑別基準があり、それ

をもとに判断していくことで「苦手意識をもつ必要はない」とお話しいただきました。

店頭でよく見かけるとびひの症例では、たとえとびひであったとしても全身症状があるなど、黄色ブドウ球菌が産生する毒素(exfoliatin)により重症化している場合はSSSS(ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群 staphylococcal scalded skin syndrome)といい、受診をすすめることも必要だと教えていただきました。そのほか、足白癬と間違えやすい掌蹠膿疱症をはじめ、尋常性乾癬、悪性黒皮腫、水疱瘡、皮脂欠乏性皮膚炎など、さまざまな皮膚炎の特徴と鑑別基準を教えていただきました。

そして鈴木先生は、「協励薬局だからこそその皮膚病に適したスキンケアをお客さまにしっかりと説明することで治療の効果を上げることができる」とおっしゃっていました。また皮膚病の鑑別の腕を上げるために、「毎日、皮膚病の写真を見る努力をしましょう」と激励の言葉もいただきました。

(レポーター 学術研修委員長 浦田悠宇)